（2）額田姫王（ぬかたのひめきみ）

①　額田姫王の生年

古来様々な論議が尽きない額田姫王、『万葉集』の額田王また『薬師寺縁起』の「額田部姫王」だが、系譜で一つだけ明らかな事がある。その最も古いものが『紀』「天武紀」（下）に記された「天皇初娶鏡王女額田姫王生十市皇女」（天皇は初めに鏡王の女（むすめ）の額田姫王を娶（めと）られて（額田姫王は）十市皇女を生まれた）である。『万葉集』の額田王は女性の王の例であるが、天皇の血統からすれば第二十八代宣化天皇五世の女王である。それが『紀』では額田姫王と記される。

「天武紀」はそれに続いて「次納胸形君徳善女尼子娘、生高市皇子命」（次に胸形君徳善の女の尼子娘を納められ高市皇子命を生まれた）、或いは額田姫王より前には「先納皇后姉大田皇女」（皇后の姉の大田皇女を納められ）とある。つまり、額田姫王が鏡王から上「納」された妻ではなく、大海人皇子が額田姫王を望んで鏡王がそれを認めて、妻に「娶」った経緯を読める。

『懐風藻』葛野王二首の項に「母は天武天皇の長女十市内親王なり」とあるので、額田姫王を娶ったのが天武天皇の初婚であり、時期的には、中大兄皇子と鏡姫王との婚姻（６４４年頃）のあと、６４５年（大化元年）頃だったと思われる。

しかし、天武天皇もそうだが、額田姫王、十市皇女（６７８年薨）、その子で天智天皇と天武天皇の孫になる葛野王はすべて生年不明である。

但し、額田姫王の生年は６３１～６３７年頃、十市皇女の生年は６５３年（白雉四年）または６４８年（大化四年）と見る説が多いようで、葛野王の生年は６６９年（天智八年）で享年を三十七歳とする通説がある。

葛野王の没年は、『続紀』に文武天皇の慶雲（きょううん）二年（７０６年）十二月に卒と記されている。そして『懐風藻』には、葛野王に対して叙位が行われた記事がある（「特閲シテ正四位ヲ授ケ　式部卿ニ拝ス　時年三十七）」。

この「時年三十七」を享年と見たのが通説になったようだが、その文章は「正四位式部卿に任じられた時に三十七歳だった」としか読めない。大友皇子や河島皇子のように死亡を告げる文に続いていないからである。そして、その叙位の年は不明であるが、没した年には正四位上だったから、三十七歳では正四位下に任じられたものと考えられる。

『懐風藻』のその記事は、高市皇子が薨じた後（６９６年七月）から文武天皇が即位する前（６９７年七月）に行われた、若すぎる珂瑠（かる）皇子（文武天皇）の即位を葛野王が正当化する内容であり、叙位を行ったのが持統天皇だった可能性はある。

しかし、正四位も式部卿も「大宝令」からだから、その叙位が大宝元年（７０１年）に行われたとすれば、生年は６６５年、四十一歳で死去したことになる。しかし、式部卿の変遷から叙位を６０３年と見れば、生年は６６７年（天智六年）で享年四十歳になる（「額田王に関する一考察」有村和子）。

本論ではこの仮説を基準にして考えたい。

従って、十市皇女が６４８年生まれであれば葛野王は二十歳の年の子になるが、６５３年生まれだと十五歳になり、これには抵抗感を否めないので、十市皇女の生年は６４８年説が妥当だと思われる。

ここから、十市皇女は夫になった大友皇子、また鎌足から大友皇子の妻（恐らく夫人）として差し出された耳面刀自とも同年だったと推定される。また、６６８年（天智七年）五月五日に蒲生野、６６９年の五月五日に山科野で行われた遊猟には葛野王の節句祝いの意味があった、と考えていた筆者の推定ともつながることになったのである。

そして、６４８年生まれの十市皇女が額田姫王十八歳の年の娘であれば、「額田姫王は６３３年（舒明四年）頃の生まれだった」と考えることが可能になる。この推定に数年の誤差はあるかもしれないが、鏡姫王より年下だったことは間違いないと思われる。

結果、本論における一つの結論として、「**額田姫王は鏡姫王の四歳下の異母妹だった**」とみなされることが導き出されたと言えるのである。

鏡姫王も額田姫王も鏡王の娘だったが、鏡姫王の母が押坂錦間皇女と推定されたのに対して、額田姫王の母は吹黄戸自（ふきのとじ）と記されている（『皇胤志』）。

本考察の命題は「姫王は天皇の娘で、王の長女だった」ことを証明することだったが、ここまでの考察で一人の王が二人の姫王の父だったことはない。それを解くには「鏡姫王は鏡王の長女だった」と「額田姫王は額田鏡王の長女だった」という相反する説が成立しなければならない。その解答への

道筋を示してくれたのが吹黄戸自である。

そして、「額田姫王は舒明天皇の直孫ではなく、鏡王が押坂錦間皇女とは別の妻との間にもうけた娘であり、舒明天皇の義理の孫になる女王だった」、という推理ができることになったのである。

そのためには、額田姫王は余程特別な女王だったからだ、と考えざるを得ない。

その理由の一つは、舒明天皇の義理の孫として生まれ、歌の特異な才能を発揮しながら斉明・天智天皇の側に仕え、天武天皇の正妻になり、天武天皇の崩御後には藤原朝臣大嶋（中臣大嶋）の後妻になったと考えられ、元明天皇の代まで歴代の天皇と近しい関係を持った、最高位の貴族級のただ一人の女性だったことに拠るのだろう。鏡王の娘が後宮に差し出された采女だったとか巫女だったという見方には全く賛同できない。

そして、額田姫王が特別視された別の理由がその母にもあったと考えて不思議は無いだろう。

②　額田部連氏

特別で異例の額田姫王に直結する吹黄戸自の出自を示唆するのが、額田鏡王と額田姫王に冠せられた「額田」にあると考えられる。

しかし、額田を冠する氏族は九州から関東北部まで多く分布しており、複雑で不明点が多い。そこで主眼を鏡王、吹芡刀自との接点に置いて探ってみたい。

そのためには、額田・額田部諸氏の中で額田部連氏に注目すべきだろう。

額田部連氏は推古期までに各地の額田部氏の頂点にあったと考えられ、その大きな原動力になったのが、そこには蘇我馬子の介在があったのだろうが、額田部皇女の養育者になったとみなされていることである。

粟田細目が６１１年に薬猟（くすりがり）で先頭集団の指揮者をしたことは既に触れたが、そこで後方の指揮官を務めたのが、飾り馬（騎馬儀仗隊）の長でもあった額田部比羅夫連だった。比羅夫はその三年前に飾り馬七十五匹を率いて唐の客人（裴世清（はいせいせい））を海石榴市（つばいち）（三輪山の南西部の金屋地域で開かれた市場）に出迎えている（『紀』推古十六年八月条）。つまり、推古天皇の名代を務めるほどの重要人物だった訳である。

このため額田部皇女は比羅夫の父（男性の額田王）に養育され、湯浴みは額田部湯坐（ゆえ）連の女性が受け持ったものと考えられる。

鏡王の父の阿方王は当然粟田氏と親交があったと思われ、その結果の一つが鏡王と押坂錦間皇女との婚姻だったと推測されるので、額田部連氏の王と比羅夫に対しては別の結果を求めた可能性が考えられることになる。

『紀』に初めて記される額田部連は５６１年（欽明二十二年）に諸国の使者の接待役に登用された額田部連（名不詳）である。これは比羅夫の祖父と思われ、阿方王の父で宣化天皇の子の火焔王子の時代だから、火焔王子と比羅夫の祖父・父と交流もあったものと考えられるだろう。

推古期に比羅夫が官馬の長として重用されたのは、額田氏一族が古くから馬の飼育・管理に携わっ

ていたためと考えられており、それと共に幅広く認められているのが、額田氏一族が製鉄や製品の製造に関わっていたことである。

六世紀後半に築かれたとみられる岡田山古墳（松江市大草町）から発見された円頭大刀に、銀象嵌の銘文「各田卩臣」があった。そのため太刀の製作者は額田部臣であり、額田臣氏は出雲から発生した部族で、皇室とも蘇我氏とも極めて深い関係を持っていたと捉えられることになった。

推古時代から額田部連一族の倭での本拠地は倭国平群郡額田郷にあった。氏寺はその中心部にある額安寺（奈良県大和郡山市額田部寺町）で、その規模は東西三町（約三百米）南北二町（約二百米）という大寺だった。

そして、額田部連一族と摂津との関連を示す痕跡の一つが、兵庫県尼崎市に残っていた額田の地名（現在の額田町から弥生が丘町辺り）だと思われるが、尼崎市立歴史博物館地域研究資料室では額田町と額田部氏との関連は不明としている。しかし、摂津国に天武期以前から額田部宿禰（旧姓は連）氏と額田部氏が、場所と居住開始時期は不明ながら、居住していたことは確認できる（『新撰姓氏録』第二帙左京神別　摂津国神別）。

一方、鏡王と威奈氏が本拠地にした摂津国河辺（川辺）郡為奈郷は、仁徳期の猪名県あたりだったと考えられ、佐伯部が天皇に馬を献上したと記されている（「仁徳紀」）。場所は猪名川の西側、現在の尼崎市猪名寺周辺で額田の北西部に隣接していた。

猪名寺と額田町は4キロメートル弱しか離れておらず、古代に輿に乗っても半刻で十分に着ける距

離なので、額田に額田部連氏がいたとすると、鏡王一族とは親交があったと見るのが妥当だろう。猪名寺（現在は廃寺）の寺域は一町半四方で伽藍配置は法隆寺式と推定されている。

また、額田町の西北西約1キロメートルで発見された若王寺遺跡では、古墳時代初頭から古墳時代末期に亘る大規模な、半島系とみられる鍛冶集団の集落跡が見つかり、各種の土器、勾玉や砥石を含む石器、四十個以上の鞴羽口（溶解炉の中に風を送り込むためにフイゴの先につけた土製の管）や鉄斧・鉄刀・鉄鏃が出土していて、砂鉄精錬が行われていたことが分った。そこで製鉄から行われたかどうかは不明だが、新羅系人が多数居住して持統天皇が養育された河内で多く見られるような、馬を運んだ船底材を再利用した井戸が見つかった。

河辺郡の南部一帯は遺跡の密集地帯のため安易な推測はできず、若王寺或いは周辺遺跡での中期以降の鍛冶作業に地域的・職制的に額田部氏の関与はあっただろうし、鏡王の移住の動機の一つもそこにあったのかもしれない、と思われる。

額田部氏の祖神について、宝賀寿男氏の関連サイト「古樹紀之房間」では「鈴木真年関係の系図史料から、額田毘道男の別称を持つ坂戸毘古が額田部連・額田部の祖先であり、天孫族が管掌した製鉄・鍛冶職掌部族である」と要約されている。

坂戸毘古は『記』で大国主の子の妻として記される日名照額田毘道男伊許知邇神の前半名に用いられた男神である。そして、大国主の別名とされる大物主の娘に比売多多良伊須気余理比売が現れ、こ

れは『紀』の媛蹈鞴五十鈴媛命で神武天皇の初代皇后であり、『記』より四年前の撰上日が記される『粟鹿大明神元記』の竪系図に見える溝杭矢瀬姫蹈鞴五十鈴姫である。

ヒメタタライスケヨリヒメの元名は富登多多良伊須気余理比売で、三書共一人の女神名になぜ二度もヒメが付くのか疑問を感じるところではあるが、語頭のヒメは比売神、語尾のヒメは存命中の姫の呼称だったように思われるが、同時に皆「タタラ」の名を残していることが目に付く。

それは明らかに、わが国古代製鉄で用いられて倭語とは思えない語感を持つ「たたら」（鞴）、即ち粘土で作った炉に空気を送り込むために必要な吹子と、たたらを用いた「たたら製鉄」（たたら吹き）に拠った名だったと思われる。また、ホトは女陰を指す語でもあったが、富登は炉に空気を送り込むために炉の前の土に掘った溝の呼び名（火処・火窪・火戸）でもあった。

大阪府茨木市の溝咋神社はヒメタタライスズヒメノミコトとその母の玉櫛媛を主祭神として、その祖父の溝咋耳命も祀っており、ミゾクイの名はミゾクイノヤセヒメまたホトと繋がる。

一方、鏡作部の遠祖は、『紀』巻第一（神代上）第七段の一書の一においては石凝姥命であり、一書の二ではその父の天糠戸命になっている。そして、イシコリドメは岩屋に籠った天照大神を引き出すための八咫鏡を作るために鹿の皮を剥いで天羽鞴を作った、と記されている。これは、初期のタタラは皮吹子で、鏡の鋳型は石だったことを示しているように思われる。

鏡作神社の祭神はアメノヌカトとイシコリドメで、近くの鏡作伊多神社はイシコリドメが祭神である。もう一社、鏡作麻気神社はアメノヌカトの更に祖として製鉄・鍛冶の神の天目一箇神を祭神にし

ている。

イシコリドメのコリは坂戸毘古の曽孫、忍凝見命（おしこりみ）と同じ意味でつけられたと思われ、前述の「古樹紀之房間」ではコリを鉄塊としている。

そして、アマノマヒトツノカミの父がアマテラスの子のアマツヒコネで、天孫額田部連や額田部湯坐（ゆえ）連、また摂津国凡河内忌寸（おおしこうちのいみき）、山背姫王の項で触れた山代直の祖である。そして凡河内（大河内）氏の稚（わく）子媛（ごひめ）が宣化天皇の妃になって威奈氏の祖になった火炎皇子をもうけたのである。

つまり、猪名氏から遠祖アマノマヒトツまで辿ることによって、額田部連氏が威奈氏よりはるかに古い有力氏族であり、平群郡額田郷で一族の額田部湯坐連（貴人の湯浴み役）も使って額田部皇女（推古天皇）、また鏡王の娘の額田（部）姫王の養育にも係ったと考えられる背景が浮かび上がった、と言えるのではないだろうか。

③　吹黄戸自（吹芡刀自）

『万葉集』巻一（雑歌）第二十二番の歌の作者は、最も古い「西本願寺本」（七～八世紀）で吹芡刀自（ふ（ふ）きのとじ）、最も新しい「元暦校本」（十二世紀）で吹黄刀自と記されている。

『万葉集』に採られた歌も人物も年代順ではないが、吹芡刀自の前後の詠み人は次表の通りで、それだけでも吹芡刀が有力な貴人だったことが分る。

そして、第二十二番の題詞（私訳）と歌は次の通りである。

明日香の清御原の宮の天皇（天武天皇）の代　十市皇女の伊勢の神宮に参拝された時、波多（三重県一志郡一志町）の横山の巌（いわお）を見て、吹芡刀自の作歌

河上乃　湯津盤村二　草武左受　常丹毛冀名　常處女煮手

（河の上の　ゆつ磐村（いわむら）に　草むさず　常にも冀（が）な　常處女（とこおとめ）にて）

巻四　相聞				巻一　雑歌								
490	489	488	485	35	22	21	20	16	13	10	7	歌番号
491			486					17	14	11	8	
			487					18	15	12	9	
吹芡刀自	鏡王女	額田王	崗本天皇	阿閉皇女	**吹芡刀自**	大海人皇子	額田王	額田王	中大兄皇子	中皇命	額田王	詠人

ウエブサイト「万葉集ナビ」によるこの意訳は、「五十鈴川の清冽な岩群れに雑草が繁茂することがないように、十市皇女様もずっと處女のように美しく清らかであらせられるように。」である。

そして、その歌は『紀』天武四年（６７５年）二月条の、十市皇女と阿閉皇女を伊勢神宮に参拝させた記事に符合するものであり、『紀』に記載のない吹芡刀自がその旅に同行していたと捉えられることになった。

吹芡刀自・吹黄刀自を旅に同行した侍女と見る説があったが、その名から『皇胤志』の吹黄戸自であることは疑いようが無い。

従って、天武天皇の義母であり、大来皇女にも十市皇女にも血はつながらないが祖母だった。また、阿閉皇女は鸕野讃良皇后お気に入りの従姉で天武夫妻の義理の娘でもあった。そのために、天武天皇は大切な皇女たちの信頼

できる保護者として、高齢でも元気だった義母に同行するように頼んだのだろうと推測できることになった。

当時飛鳥から伊勢へは徒歩で一週間くらいかかっており、警護の武人たちや輿をかつぐ人夫たちも入れてかなりの人数だったから、街道が整えられていた宇陀から名張を経由して北東そして東に向かい、波多を越えて南東に下って松坂辺りで一泊、中村川・金剛川・櫛田川を渡って斎宮（明和町）に伺い、それから伊勢宮に詣でたと推定される。

但し、当時はまだアマテラスも内宮も整えられていなかったはずである。従って、その前年から斎宮として送られていた大来（大伯）皇女が仕えた神は丹波から迎えられた豊宇気毘売神（とようけびめ）（『記』）で、それを祀っていた宮は雄略期に創建されたと伝えられる現在の外宮だったとみなければならないだろう。

神宮の形成や歌に詠まれた地名の疑義はともかくとして、第二十二番の歌調は、筆者の思い込みかもしれないが、皇女たちに対する気後れや遠慮はまったく感じられない。むしろ巫女の神託めいた言葉にも思われる。そして、その歌が明日にも斎宮に着ける日に詠まれたのなら、吹芡刀自の頭の中には、大来皇女の前の伊勢斎宮になった酢香手姫（すかてひめ）皇女が浮かんでいたように思われるのである。

なぜなら、用明天皇の娘だったその皇女は『記』では須賀志呂古郎女（すがしろこ）と、蘇我やスサノオに関係するとみられる須賀の文字で記されており、母は異説もあるが、葛城直磐村の娘の広子（『記』比呂）とされているからである。

酢香手姫皇女の祖父が磐村なら、大来皇女は天智天皇の孫娘である。磐群があえて磐村と書かれたとすれば、「河の上のゆつ（神聖な）磐村」にはそういった心情、また歌全体で大来皇女と大津皇子との関係を危惧する気持が込められていたのではないだろうか。

その歌が詠まれた年の関係者の年齢は、大来皇女は十五歳、６５３年生まれの十市皇女は二十三歳、のちに元明天皇になる阿閉皇女は十六歳だった。

これに対して、６３３年（頃）生まれと推定した額田姫王から想像すると、吹芡刀自は６１６年くらいの生まれだったと考えられる。従って、伊勢に詣でた年には六十歳くらいだったことになる。これは額田姫王が健康で長寿だったと推定されることにつながる。

第二十二番歌についてここで追記しておきたいのは、万葉学者だった伊藤博氏が『遊宴の花―額田王論―』（「萬葉」第八十二號　昭和四十八年八月）において、「この女性（吹芡戸自）は額田王と相似る面を持った歌人だったと考えるが」と、所感を述べておられることである。歌人の恐るべき感覚と感嘆せざるを得ない。

伊藤氏は同論においてそれとは別に、「額田をめぐって同母兄弟二人に恋愛葛藤の事件がくりひろげられたという証拠は、古代文献のどこにも指摘できなくなった。額田は天智の妻などではなかったのである」とも述べている。

これに対して本論筆者は、額田姫王は恐らく斉明天皇のお気に入りとしてまた身分的には女官たち

のまとめ役の責任者として、同時にその裏では、天智天皇が大海人皇子の妻と娘（十市皇女）を質（人質）とするために、後宮に留まることを余儀なくされたのではないかと考えている。

歌には素人の筆者が感じるところ、伊藤氏の額田王の歌の解釈は的確であり、数々の指摘にも全面的に同意するものである。

観点を変えて鏡王とフキノトジの名称について見直してみると――、

鏡王の生育地は不明だが、「額田鏡王」の尊称を素直に眺めると、その額田が生育された氏族か場所を示しているように思われる。

管見にして額田鏡王の名をそのように解した論を目にしたことが無いが、「生育地または養育氏族名（額田）＋字（あざな）（鏡）・称号（王）」、つまり「押坂（忍坂）＋彦人＋大兄皇子」と同形の組合せと見れば、鏡王は額田部皇女・額田姫王と同様に、摂津の額田ではなく、額田郷で額田部連氏に育てられたと解釈できるのではないだろうか。

鏡王の父の阿方王の読みが確定していないが、筆者はこれをアカタではなくアガタノキミとして、平群縣（あがた）か額田縣と直接的な関係があったのではないか、と想像している。

阿方王は、鏡王と押坂錦間皇女（推定）また吹黄刀自との婚姻、更に鏡王の扶養先を決めた重要人物だった。従って、阿方王は飛鳥に居住していたと推測され、鏡王の扶養先には飛鳥の北にあった額田部連氏の本拠地、平群の額田郷を選んだと考えるのが妥当だろう。飛鳥からわざわざ生駒山地から

河内国を越して、摂津国の大都の難波の先になる額田を選んだとは考えにくい。

ここからも、鏡王の時代までに馬と鉄を通じて皇室とその祭祀に密接に関わって額田一族の頂点に立った額田王（不詳の男王）の娘を鏡王が求めても何の不思議も無かった、とは言えるだろう。

そして本書では、その娘が恐らく長女だった吹黄戸自であり、額田部家の財を受けて鏡王の居住地も民も管理監督したので戸自、刀自の尊称をつけて呼ばれた、とみている。

その「戸」が意味したのは、欽明朝以降に存在して「養老令」（７５７年施行）においては五十戸を一里（さと）とした、課税基準と人民統制のために編み出された父系による地域集団の単位であり、戸主を中心とする家族や縁者だけでなくそこの住人や奴婢なども含んだ、およそ二百人の成人組織だったと理解される。

従って、刀自は単なる一家庭の高齢の女主人ではなく、豪族の王の家長的権威を受け継いだ娘だった。歴史学者の義江明子氏の表現（「刀自」からみた日本古代社会のジェンダー」）を借りれば、「村の統率者としての刀自・家の経営者としての刀自」である。

額田姫王の母が刀自と称されたことは、額田姫王が吹黄刀自から家督を受け継いだ可能性を示唆している。

一方、複数いた女王の中から、また三世女王の中からなぜ『紀』は姫王を七人しか記さなかったのか、という疑問はまだ解かれていない。

筆者には「大刀自」と刀自」の定義や区別や定義を把握できているとは思わないので、ここで姫王に対して結論めいた定義を述べることは短絡的かもしれないが、「一軒の家庭ではなく、家の集合体の「戸」を取り仕切る、天皇から皇子や王を経て継承した家督の相続権を持つことを認められた、戸長的・族長的な三世女王が姫王だった」と解釈できるのではないか、と考えている。

そして、それを示すのが吹黄戸自の表記で、『皇胤志』が残した功績だったと認めたい。

また、姫王が用明期から元明期までしか存在しなかった理由は、刀自の性格や資格が蘇我氏の規定だったことにあったのではないか、と思われるのである。

「鏡姫王は鏡王家の刀自であり、額田姫王は額田部家の刀自だったから、歴史上唯一、鏡王だけが二人の姫王の父になった」、と理解できることになるのである。

そして、本書で吹黄刀自を額田部連氏の娘と見る理由は、フキの名前に製鉄との関連性が深く見られることである。

系図では吹黄刀自は万葉集では吹芡刀自はフフキノトジと読まれ、植物のフキ（蕗）は古語のフフキが転じた語である。

「語源由来辞典」（ウェブサイト）によるフフキの語源として、冬に黄色い花が咲くことから「フユキ（冬黄）の中略で「フキ」になったとする説や、ふきの葉は大きく、少しの風でも揺れることから「ハフキ（葉吹き）」「フフキ（風吹き）の意味とする説などがあるとしている、つまり、フフキ>フキ

は黄、風、吹くとも切り離せない意味を持っていたとみなされる。

また、芡はミズブキ（水蕗）、スイレン科のオニバス（鬼蓮）のことだった。槍の穂先のような形の葉が鋭いとげに覆われていて、水面に伸びて広がった葉は時に二メートルを超すこともある。ここから、吹芡は肌に刺さるトゲのような飛沫を飛ばす溶けた鉄や銅、吹黄は吹子で風を送って高温になった金属の色と結びつけられそうである。

そして、「吹く」は氏数々の神名に付けられたタタラと直結する語であり、フキの茎もフイゴ（鞴、吹子）を連想させる。

但し、吹黄刀自について宝賀寿男氏からは、そこ（威奈郷）に額田王（額田姫王）の実家があったのではないかと述べておられる一方で、吹黄刀自は平群臣一族かと思われるところがある、平群臣一族に額田首があり額田部連の居住地が近い、また額田部連の系図も初期のものしか知れずで決め手がない、額田王はどちらの額田なのかわからない、とのご意見を戴いている。

武内宿禰を祖とする蘇我氏と同族の平群臣は、『紀』武烈即位前紀から海柘榴市（つばいち）にあった亭（うまやたち）（官馬の駅舎）の管理に従事していたことが確実である。海柘榴市には推古天皇の宮もあった。また平群氏の同族に馬の飼育・管理に従事した額田首がいた。

多数の史学者が考察して論じられてきた複雑な額田、額田部及び復姓に関して、筆者に論じる資格も余地は無い。しかし、吹黄刀自の名と製鉄との関連性は余りにも深いとみなされ、刀自とされたこ

とからも、ここでは「吹黄刀自は平群の額田郷に居住した額田部連氏本家の長女で、額田郷で養育された鏡王との出会いから、摂津の威奈郷に戻った鏡王に求められて額田に移り、額田姫王をもうけた。額田姫王は摂津で生まれた」との仮説を提示しておきたい。

ここで、『万葉集』の歌をもう一首、六七八年四月に十市皇女が宮中で突然薨じたあとに、十市皇女との再婚を望んでいた高市皇子が詠んだ嘆きの歌とされる、巻二　第一五八番を加えておきたい。

山振之　立儀足　山清水　酌尓雖行　道之白鳴

（山吹の立ちよそひたる山清水汲みに行かめど道の知らなく）

まっ黄色な山吹の花々に彩られた山清水（泉）に水くみに行きたいのだが道が分からない）（「万葉集ナビ」）

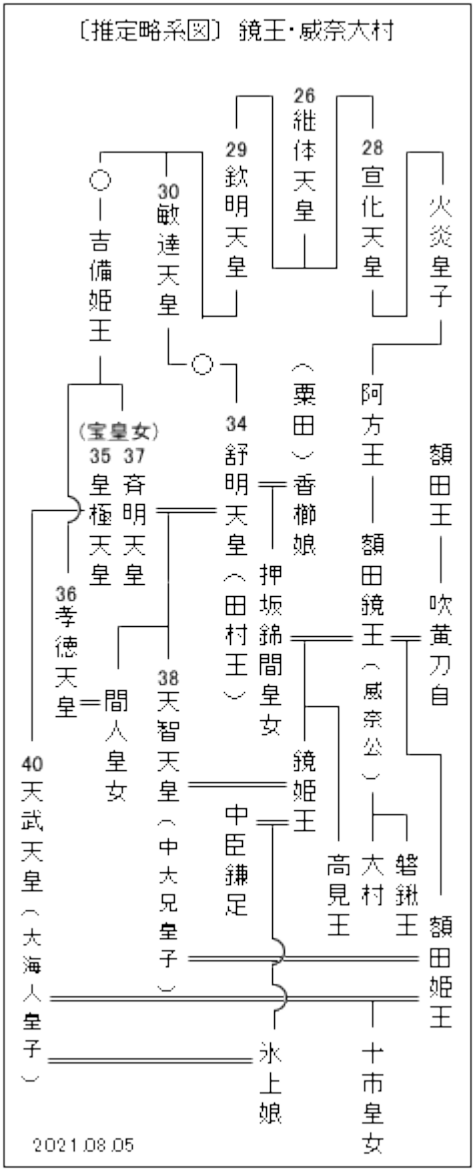
黄色の山吹に飾られた清水が湧き出る泉が黄泉（死者の国）を示していることは明らかで、生きている自分はそこに行く道を知らないからもう十市皇女に逢えないという嘆きが表現されている。

しかし、その歌の最初に詠み込まれた山振（やまぶり）（山吹）は黄色に直結する語で、春に黄金色に近い黄色の花をつける。黄色はまた溶けた鉄の色であり、高温で溶けた鉄の炎は古くから山吹色とも称されて

いる。だから、その歌は最初に吹黄刀自を思い出させる意図があったのかもしれない。

そして、十市皇女が山吹に守られていると解釈すれば、吹黄刀自は十市皇女より少し先に死去していたと考えられるから、その享年は六十三歳くらいで、伊勢参りから三年くらいで死去したように思われる。

しかし、実際には高市皇子は吹黄刀自の墓所も、慕っていた異母姉の十市皇女が赤穂に葬られたことを知らなかったはずがない。十市皇女が吹芡刀自に導かれて伊勢の宮に詣でたことも知っていたはずである。



吹黄刀自も十市皇女も死して神になった、黄泉の国でも祖母は孫娘を守っている、その孫娘の夫を攻めるいくさを指揮したのは自分だから、自分が死んでも二人のもとには辿り着けないだろう、と筆者には感じられる歌である。

ところで、『紀』には「赤穂」に葬られた女性が二人記されている。十市皇女と、鎌足と鏡姫王の娘で天武天皇の夫人になった氷上娘（氷上大刀自。６８２年薨）である。

十市皇女は死後七日後、氷上娘は六日後に葬られており、二人共宮中で急死してから埋葬までの日数が極めて短い。流行り病があったのかもしれない。そして、当時には多くあることではあったが、夫々の母、額田姫王も鏡姫王も娘に先立たれるという逆縁の悲しみを味わったのである。

しかし、その「赤穂」の場所はどちらも特定されていない。

そこで、本論とは直結しない蛇足になるが――、

十市皇女の墓の有力な候補地として、奈良市高畑町の赤穂神社（『延喜式』「神名帳」赤穂明神）と同じ町内にあって「高貴の姫の墓」と伝えられてきたとされる比売塚が有力視されているようだが、新薬師寺横の南都鏡神社の別社になっている。しかし、南都鏡神社は藤原広嗣を祀る唐津市の鏡神社を勧請した藤原氏の氏神だったから、鏡王・威奈氏、額田部氏とは無関係である。

あくまで筆者の感覚だが、注目に値する別の遺跡がある。

桜井市慈恩寺にあって朝倉富士とも呼ばれる外鎌山（とかまやま）（旧名忍坂山）の西部から南部になる忍坂周辺

は古墳や史跡の密集地帯で、その尾根の南端に八角墳の段ノ塚古墳（舒明天皇陵）と糠手姫皇女押坂墓、鏡女王忍坂墓等々がある。また外鎌山の南麓で東から西に流れる粟原川（おおばらがわ）の中ほどの南側に粟原寺（跡）があり、そこは額田姫王が建立に関わった寺だった。

そして、段ノ塚古墳の北西、桜井市赤尾から粟原川を渡って数百メートル北に忍坂（おっさか）古墳群があった。その内の四基が桜井市朝倉台2号公園に移されたのだが、七世紀後半から末頃に築かれたとされるその8号墳と9号墳の形状と構造に著しい特徴がある。

両墳墓の規模・構造・石材はほぼ同じで、径約十三メートルの円墳で、磚槨（せんかく）（磚積）式横穴式石室を持っていたと推定される。磚槨式とはレンガ状（板状）に剥離する石を積み上げる工法で、そこで使われていた石はその辺りが特産の室生火山岩（通称榛原石、室生石）である。その工期は、岩を切り出して陵墓の形や規模に応じて加工する切石式より短期間で済む。その工法で最大規模の帯解黄金塚古墳（本論（2）⑧）のおよそ半分の長さをもつ墳墓に、花山西塚古墳（桜井市粟原。七世紀後半頃。国史跡）がある。その被葬者・遺物は不明である。

そして、9号墳は全体としてT字型をしており、羨道の奥にある玄室は、帯解黄金塚古墳が方形であるのに対して、幅が長さを上回る長方形である。

しかし、8号墳の玄室は正六角形だった。出土した歯は破損した小片で分析はできなかったとのことである（桜井市教育委員会文化財課）。

六角墳は長野県、茨城県、千葉県にもあるが、８号墳以外に学術的に六角墳と認められたのは、マルコ山古墳（明日香村真弓。七世紀末～８世紀初頭。切石で築かれた対角長約二十四メートルの不正六角墳。皇子が埋葬されたと推定される）と塩野六角古墳（姫路市安富町塩野。自然石で築かれた対角長七メートル前後の不正六角墳）だけである。

六角墳を大和地方では蘇我氏が主流にした方墳と舒明期～文武期の天皇陵に採用された八角墳との中間形と捉えられるので、皇族・豪族の首長級人物の埋葬墓だったことは間違いなく、８・９号墳が円墳とされるのは、その築造時期から天武期～持統期の皇女級・女王級の女性が葬られたことを示していると考えられる。

外鎌山の西麓、段ノ塚古墳の西北西には忍坂坐生根（いくね）神社（式大大社）がある。元の祭神は生根神（薬草神或いは気生根＝清い水の神）だったと考えられるが、額田部湯連等の祖とされる少彦名（すくなひこな）神を祀っている。生根神社といえば摂津（大阪市住吉区）の生根神社が有名で、そこの祭神も少彦名神である。

ところが、本殿を持たずうしろの磐座をご神体とする忍坂の生根神社に、生根薬とスクナヒコナを祀るように奏上したのが額田部氏だというのである（「大和志料　下巻」国立国会図書館デジタルコレクション）。

住吉と忍坂の生根神社のつながり、忍坂にも額田部の関係氏族が居住していたこと、また粟原寺と近いことから、現時点では特異な忍坂８号墳の被葬者が十市皇女だった可能性は捨てきれないようである。

④　伊福吉部徳足比売臣

額田姫王の没年を考察する前に、額田姫王が生存中に死去した別の姫について述べておきたい。

それは江戸時代に鳥取県で出土し、東京国立博物館に所蔵（重要文化財）されている銅製の骨蔵器の蓋に彫られていた「伊福吉部徳足比賈臣（いおきべのとこたりひめのおみ）」である。その墓誌の文言は国文学研究資料館のサイト「皇漢」で公開されている。イオキベはイフキベとも読まれる。

神道には男神の比古神に対する女神の比売神があり、貴族や豪族の家で姫とか媛と呼ばれていたであろう貴婦人を女神に見立てた死後の追称・尊称が比賈・比売である。『紀』が記す推古天皇の諡号は豐御食炊屋姫尊で、『記』では豐御食炊屋比売命としており、名前の最後に付けられた尊や命が神を意味する尊称である。

生前徳足姫と呼ばれていたと思われる徳足比売は鳥取県東部、因幡国法美郡の伴造だった伊福吉部氏から文武天皇の後宮に出仕した采女で、文武天皇の慶雲四年（７０７年六月二十三日以前）に従七位下を与えられ、その一年後、元明天皇の和銅元年に藤原京で没した。そして、その遺骸は国元に送られて三年後に火葬された。

しかし、朝廷に仕えず官職を持たなかった采女が存命中に「臣」だったとは認められず、采女が火葬され骨蔵器に入れられた他例も無い。

その銘文には別の注目点がある。――四位・五位の臣下や諸王の死を示す「卒」とされていることである。それが従五位下であっても従七位下の四階級も上である。従って、卒も死に伴う追位があっ

たことを示しており、これも極めて異例である。

「大宝令」の「後宮官員令」で規定された采女の条件は、郡司級の地方豪族の容姿の優れた姉妹か娘で、年齢は十三～三十歳に制限されていた。そして、『続日本紀』は天皇即位（６９７年）後に母の藤原宮子（不比等の女）が夫人になり、石川刀子娘と紀竈門娘が嬪になったと記す。それは後宮の妻たちの序列が決められて後宮の体制が整えられたことを示すと捉えられる。

徳足比売がその年に後宮に献上されたとすると、６５４～６７１年生まれだったこと、つまり三十七～五十四歳だったことになり、その十年後の７０７年に異例の叙位を受けた理由を想像できない。

しかも、７０７年正月の朝賀の記事が欠けており、文武天皇はその年の六月十五日に崩御している。但し二月に昇進の叙位の一部が記されている。采女に対する特別の叙位が男性の宮人たちと同様に記録されたとも思えないが、その頃に行われた可能性が無いとは言い切れないだろう。

徳足比売の父を孝徳朝の６４６年に因幡国の評（郡）の督（長官）に任じられた伊福部臣都牟自（つむじ）（６５８年死去）とする説がある。この場合には都牟自の生年は遅くとも推古期の６２０年以前と考えられて、徳足比売の生年は舒明期が濃厚になり、６４０年を仮定すると７０７年には六十八歳、６３０年なら七十八歳になり、叙位の理由は更に想像困難である。

観点を変えて、徳足比売が文武天皇即位の際に十三歳で献上されたと想定すると６８５年生まれになり、天皇より二歳下だったことになる。

そうなると、７０７年に二十三歳くらいであれば、文武天皇の子をなした褒賞として従七位下が叙

位されて、翌年死して臣に相応しい卒去と扱われた、とみなすことができる。筆者が得心できる理由はこれしかない。

そしてここからは、年代的にも徳足比売の父を、宝賀寿男氏編纂の『古代氏族系譜集成』に示されている通り、都牟自の子で法美郡領だった伊福部臣国足とみなすことが可能になる。

国足は『因幡国伊福部臣古志』（７８４年）に伊福部氏の第二十七代当主として「大乙上国足臣　従四位上左衛門督　文徳天皇　大宝年中」とある。藤原京の遺構と平安京から推測すれば、藤原京の伊福部門（西面の北門）警固の責任者だけでなく、従四位上左衛門督として宮城の門を警固する左衛門府の長官だったことを示している。

但し、その文徳天皇は古史料の文武天皇の誤写か誤記だと思われ、大乙上は都牟自に授けられた冠位で天武期に廃止されていたのでそれも誤りである。また、伊福部氏の始祖を大己貴命としていることに対しては、他系図との比較は筆者には困難である。

『古志』には疑問点が多いが、国足が宮城警備の責任者として適齢になった娘を後宮に差し出した背景は理解できる。そして、徳足比売が７０７年に文武天皇の子か女をもうけていたとすれば、伊福部氏は皇親になっていたはずである。

しかし、大宝元年（７０１年。『扶桑略紀』に拠れば二月四日）には文武天皇と藤原宮子（不比等の女）の間に首皇子（のちの聖武天皇）が誕生しており、不比等は正三位大納言まで昇進していた。徳足比売が子女をもうけたとしても、不比等に不都合な記録が抹消或いは当初から採録されなかった可

能性は十分に考えられるだろう。

骨蔵器の銘文は、徳足比売の死去から火葬までを「戊申秋七月一日卒也三年庚戌冬十月火葬即殯」、それに続いて「故處末代君等不應崩壊」、最後に銘文が彫られた日付「和銅三年十一月十三日巳未」がある。

先ず、徳足比売の死去から火葬まで三年三カ月もかかった理由に、和銅元年（７０８年）に詔（みことのり）が出されて和銅三年三月十日に実行された、藤原京から平城京への遷都の準備があったことは否めないだろう。比売の死去がその期間中だったからである。

文武天皇　七〇七年（慶雲四年）　前半　徳足比売に対して従七位下を叙位
　　同年　　七月　文武天皇崩御、火葬
元明天皇　七〇八年（和銅元年）　二月　遷都の詔
　　同年　　七月　徳足比売が死去
　七一〇年（和銅三年）　三月　平城京に遷都
　同年　　十月　徳足比売を因幡で火葬
　同年　　十一月十三日　骨蔵器を埋葬

我が国における火葬は、７００年四月に僧道昭が遺言により初めて火葬に付され、その後貴人の火葬が広まり、同年四月から十一月の間に威奈大村、持統上皇は７０２年十二月、文武天皇は７０７年

七月に火葬され、そして徳足比売が７１０年十月と続くことになる。

文武天皇の治定陵は檜隈安古岡上陵（ひのくまのあこのおかのえのみささぎ）で考古学名は栗原塚穴古墳（明日香村栗原）で、考古学会においてはその北にある八角墳の中尾山古墳（明日香村平田）を真陵とみているが、飛鳥の南に葬られており、徳足比売の遺骸も平城京に移されるはずはなく、７０８年七月一日から７１０年二月の間に藤原京から日本海側の陸路或いは船で国元（鳥取市国府町）に送られたものと考えられる。

そして、死から火葬までの異常な長期間を考えると、その火葬は遺体ではなく白骨が焼かれたと思われ、それが国元で行われたことを示すのが「火葬即殯」である。これはまた、火葬のあとからすぐに殯が始められて、その間に恐らく因幡の製鉄氏族だった伊福部氏の一族によって骨蔵器が作られて、それを納める岩が加工されて、半月～一カ月後に遺骨が骨蔵器に納められたものと考えられるのである。

鳥取県埋蔵文化財センターで開催された「鳥取まいぶん講座」（第４回）の資料『因幡の国府とその周辺』では、その「火葬即殯」を「火葬し即ちこの処に殯す」また「故處末代君等不應崩壊」を「故に末代の君等まさに崩壊すべきからず」と訳している。

銘文の起草者は記されていないが、その強い口調に感じられるのは僧が被葬者の成仏を願う言葉ではなく、火葬と殯をせざるをえなくなった徳足比売の死に対する憤りであり、国足が後世の者たちに対して下した命令だったように思われる。

ここから、平城京への遷都が終って一段落した国足が、娘の葬儀のために一時的に帰国した可能性

が考えられる。

「文武紀」慶雲三年（７０６年）二月十六日条に長上官（常勤の宮人）の転任・交代について「大宝令」の「選任令」を引いた詔が記されており、そこに六考（六年期限）を基準とする規定があり、二年毎の延長などが記されている。

そして、『古志』の記録が正しければ、国足の左衛門府督の就任は７０１～７０３年であり、７１０年まで督であれば六考に加えて一回以上の再任があったと推定される。従って７１０年に督の任期を終えて帰国した可能性は考えられる。

いずれにしても徳足比売の火葬は国足の帰国を待って行われた、或いは国足が帰国するまで火葬は行われなかった、従って火葬の開始も埋葬も国足がその場所で命じたと考えられるので、それが遷都後七カ月目の火葬になった理由だと思われる。

この点からも、「骨蔵器」銘文は国足作と推測してもよいと考えられるのである。

「伊福吉部徳足比賈臣」の尊称は、文武天皇の寵愛を受けたであろう徳足姫に対して、元明天皇が授けた諡号だったと思われる要素があり、これについては次の最終項をご参照戴きたい。

蛇足だが、伊福部連氏も製鉄氏族で、滋賀県の最高峰伊吹山を西北方向に遥拝する地（阜阜県不破郡垂井町岩手字伊吹）に、美濃に居住した伊福吉部氏が氏神を祀ったと思われる美濃国二の宮伊富岐（いぶき）神社がある。ウィキペディアに拠れば和銅六年には存在したとされており、祭神は気吹男彦の別名を持

つ多多美彦命）、山の傾斜を利用したたたら製鉄（野だたら）を擬人化したとも考えられるヤマタノオロチ等を祭神にしている。

更に、伊富岐神社の東南東に製鉄の神、金山彦命を祀る美濃国一の宮南宮大社（垂井町岩手字伊吹宮代。重文）があり、金山祭（鞴祭）が残っている。

従って、伊福吉・伊富岐は伊吹山や息吹と共に、タタラに関係した語だとみなされる。

またウィキペディアによれば「伊福部の伴造氏は、臣や連のほかに、君・公などがあり、一族には直・首姓のものも存在した」とあり、この内容は多種の姓を持っていた額田を冠する氏族も同じである。

それでは、徳足比売は文武天皇の子女をなしたのか――。

これに対しては、その可能性を推定し得る皇族女性が一人だけ存在する、というのが本書の答である。

『延喜式』「巻第五（神祇五　斎宮）に「未婚の内親王から選んで占え、内親王不在の場合は世代によって女王を定めて占え」といった意味の規則が記されている。

斎宮は皇室から伊勢神宮と賀茂神社だけに送られて神に仕える皇族の斎王の御所で、ここでは伊勢斎王について述べると、藤原氏が政権を、祭祀を中臣氏が牛耳るようになってからは、政権に影響を及ぼさないような皇親が選ばれたという実態があり、天皇の無病息災を祈る斎王は天皇が崩御すると

その祈りが通じなかったとして退下するのが通例だったが、政変や政権の都合によって突然変えられることがあった。

文武朝になって慶雲三年（７０６年）から斎王に送られたのは天武天皇皇女の田方皇女で、天皇崩御後に退下して結婚したようである。

しかし、文武天皇の早世によって適齢の男性皇嗣が不在になり、天武・持統系王朝に危機が迫る中で、文武天皇の姉（氷高皇女）が７１５年に元正天皇として即位した。それを主導したのが藤原不比等であり、元正天皇即位の後で不比等が常に上位に置いてきた左大臣石上朝臣麻呂が薨じて、名実共に不比等が朝廷の臣下の頂点に立つことになった。

しかし、田方皇女が退下したあと、斎王の適任者も不在になった。終生独身だった元正天皇には皇女はいなかったし、早世した文武天皇に孫娘はまだ生まれていなかったからである。

その混乱期の７１７年に、『続日本紀』は「久勢（くせ）女王を斎宮として伊勢大神宮に奉仕させた」（元正天皇の霊亀三年四月条）と記す。従って、久勢女王はその年に未婚、つまり十三歳未満だったものとみなせる。

このあと７２１年に斎王になったのは、五歳の井上女王（首皇子と縣犬養氏の女との間に生まれた女王）で、聖武天皇の即位によって井上内親王になったが、山部親王（のちの桓武天皇）の立太子に伴う政変によって薨じて、皇統は天智天皇系に戻ることになる。

久勢女王の系譜は一切不明だが、文武天皇と徳足比売との間に７０６～７０７年に生まれたのであ

れば、７１７年に十歳か十一歳で、正しくは久勢内親王とされるべき尊称以外は、斎王としての資格は有していた。しかも、文武天皇ではなく天武天皇を基準にすれば、四世女王だったことになる。

そこには藤原氏による虚偽の記載や改竄とはいえない潤色という手法によって、伊福部氏を表に出さないための操作がなされたのかもしれない。

また、久勢女王が斎王になった時に斎宮頭に任じられたのは、猪名真人法麻呂（のりまろ）（従五位下）で、前掲の『百家系図』でも『皇胤志』でも高見の子になっている。大紫を授けられた高見の子で宣化天皇六世、鏡姫王と額田姫王の甥でしかも六十歳近くだったと思われる法麻呂が従五位下に留められて斎宮に追いやられたことは、天武天皇と近しかった旧皇族の末裔だけでなく、天武天皇系だが持統天皇系でない王や女王が朝廷の中心から疎外されてゆく、流れの一端が見える人事と言えるだろう。

ここまでの帰納的な推理で得られた本項の推論は、「伊福部徳足姫は文武天皇の采女から側室になり、久勢内親王の母になって叙位を受けた。そしてその諡号は文武天皇の母だった元明天皇によって贈られた」ということである。

二十四年という短い生涯だったにもかかわらず出自を明かす伊福部の刻名を許され、臣としての卒去の葬儀を許され、また神格化された比売の諡号を贈られた理由は、そう考えなければ解けないからである。

そして、伊福部徳足比売と共に天武・持統・文武・元明期を生きたのが額田姫王である。

⑤　比賈朝臣額田

額田姫王に長寿説が出される原因は二つある。

一つは持統天皇の吉野行幸に同行した時に、弓削皇子（天武天皇の第九皇子）が額田姫王に贈った歌（巻二第一一一番）である。

持統天皇の吉野行幸は６８９年から崩御する６９７年まで三十一回に及び、弓削皇子の存命中なので、それはいつの年か分からない。仮に最後の行幸の時だったとすれば、額田姫王は六十六歳だったことになり、同行してそこで歌を返している（一一二・一一三番）から、まだまだ元気だったと考えられる。

本項では個々の歌は示さないが、難解至極で読みと意味が定まらない巻一第九番を除いた他の十首からは、斉明天皇・天武天皇・持統天皇と一族に対する恩義に厚く、過激な或いは不本意な人生を強いられる皇族たちの近くにあって、即興歌で遊べる才能を持った親しみやすい人柄だったことは想像に難くない。

額田姫王の享年を推定させる史料の一つが談山神社所有の粟原寺（おおばらでら）の伏鉢（ふくばち）（塔頂部の露盤（ろばん）上で相輪の下部に置かれた穴の開いた鉢状のもの）で、国宝に指定されて現在は奈良国立博物館に寄託されている。

その銘文の一部を私訳すると、以下のようになる。

「この粟原寺は仲臣朝臣大嶌（あそみおおしま）が持統天皇に願い出て草壁皇子を敬い伽藍の造営を請願した寺である。

故に比賈朝臣額田がその一年後から和銅八年まで、二十二年をかけてこの地に伽藍を建て金堂を作り釈迦丈六尊像を鋳造して納めた。和銅八年四月にそれを敬い三重の宝塔と七科の宝と路盤を進上した。草壁皇子の神霊が菩提果を得て、先霊七世と共に彼岸に登ることを願い、大嶋大夫が仏果を得ることを願う」。

草壁皇子の薨年は６８９年四月で、その埋葬地を宮内庁は円墳の岡宮天皇真弓丘陵（奈良県高市郡高取町森）、としている。しかし、史学会では出土した歯の分析などから真弓丘陵のすぐ北にある八角墳の束明神古墳（高市郡高取町佐田）と見る説が主流である。

しかし、粟原寺とその銘文の解釈に関しては多くの疑問点がある。

（１）草壁皇子が薨じて四年後にようやく寺の造営が始まったこと。

（２）寺の造営に二十二年もかかったが完成しなかったこと。

（３）造営に着手した比賈朝臣額田とは誰か。

（４）誰が完成させたのか。

（５）彼岸に昇られた七世先霊とは誰か。

そこで、これらに対する本書の見解を簡単に記しておきたい。

（１ａ）比賈朝臣額田が粟原寺の造営に着手してから和銅八年（７１５年）まで二十二年かかったことから、着工は持統七年（６９３年）だったことになる。それは大嶋が草壁皇子を祀る寺を造りた

いと進言した年の一年後だから、進言は６９２年だったことになる。
草壁皇子を祀る寺を造りたいという神祇伯大嶋の申し出を草壁皇子の母（持統天皇）も妻（阿閇皇女）も大いに喜んだはずで、拒絶したとは思えない。しかし、天皇と皇女が係わるとなれば国寺にしなければならないが、当時朝廷の最大の課題は莫大な国費を伴う藤原京への遷都だった。その造営地の下見は６９０年十月に再開されて、宮と新都の造営が進んでいた。
その計画と準備を取り仕切っていたと考えられるのは三十一歳で諸臣第十七位の直広肆になっていた藤原不比等で、従兄で直大肆の大嶋の一階級下まで昇進していた。そして、６９３年三月に大嶋が卒去して、その翌年末に遷都が行われた。しかし、大嶋は明治初期まで続いた神祇伯の中で最下位（第十一位の直大弐）での死去であり、その冠位が追位だった可能性も考えられる。
その流れから想像するに、大嶋は元は遷都反対派で、草壁皇子の墓所の近くに菩提寺を建てることを進言したが、許可を留保されたのではないかと思われる。
そして、大嶋の死後に比売朝臣額田が大嶋も祀る寺にしたいと願い出たと思われるのだが、それは既に遷都を決めていた朝廷には、皇子と臣下を合祀する寺は国寺にできないという口実を与えることになり、私寺の造営は認めるが場所を藤原京の東方の山中に指定した、という経緯を生んだように考えられるのである。
これが大嶋の進言から造営着手までに四年かかった理由だったと理解できる。

（２ａ）持統天皇と阿閇皇女の祖父だった石川麻呂が平地に近い山を整地して作った山田寺の標高がおよそ１２０メートルで、６４１年の整地から金堂の建立まで二年かかっており、僧房の一部ができたのは更に五年後だった。

これと比べれば粟原寺は小規模だったと思われるが、その場所は標高約２７０メートルで藤原京より２００メートル上になる。比売朝臣額田の私財の他に持統天皇と阿閇皇女の私的な援助があったとしても、竜門山塊北麓の樹木を伐採して資材を運び上げる道を作り用地を平地にするだけで、最低でも数年を要したとみなさなければならない。

しかも、粟原寺建立の工事が始まって三年後、つまり建物の基礎も形もでき上っていなかったと思われる時期に、天皇は不比等を重用することで文武天皇（草壁皇子と阿閇皇女の皇子）への譲位を敢行した（６９７年）。

そして、７００年（文武四年）には、粟原寺との関係は不明だが、皇室の信奉も厚く当時一番の名僧と崇められて行基の師にもなった道昭和尚（わじょう）がわが国で初めて火葬されたのだが、遺言で指定したその場所は粟原だった。

その後持統上皇が７０３年に崩御、その四年後に今度は文武天皇が病死して、その母だった阿閇皇女が元明天皇として即位することになった。しかも、すぐに藤原京は捨てられて平城京に遷都することになった。

このような皇室の変遷に伴う服喪や祝賀の期間、その間の都の移転などを差し引いて考えれば、

工事開始から伽藍を配置して金堂と釈迦像を納めるまでにかかった二十二年を、あながち長過ぎるとは言い切れないだろう。

（３ａ）官職を持たずに従七位下だった徳足比売に伊福部氏の姓だった「臣」の称号を追諡して、父の国足に「卒」の葬儀を行うことが許したのは元明天皇だったと推定される。

なぜなら、鎌足は天智天皇から藤原姓を授かり、不比等が文武天皇から不比等の一族だけを藤原姓として旧中臣の一族は中臣に戻されたことからも分かる通り、姓は名家の出を示す標であり、その中から能力ある官人を選んで朝廷の組織を管理するために、改姓や賜姓は天皇の専権事項だったからである。

一方、和銅八年に完成した粟原寺は元明時代の最後であり、女性の比売額田が朝臣だったとは考えられないので、それは近親者の姓であり、比売朝臣額田も元明天皇によって贈られた諡号だったと推測される。

そして、粟原寺の造営を願い出た人物が仲臣朝臣大嶌（中臣朝臣大嶋）でその遺志を受け継いだのが比売朝臣額田だったから、大嶋の時代に額田の諱を持つ女性貴人では額田姫王しか知られていない。

額田姫王は、恐らく天武天皇の生前の命により天皇の崩御後に大嶋の妻に下ってその遺志を受け継いだので、比売の神格と大嶋の姓だった朝臣を追諡されたものと考えられるのである。

また、徳足比売臣から類推されるのは、存命中の額田姫王は天武天皇の初妻として徳足姫より上位に置かれたことはまちがいなく、朝臣に相応しい「薨」の葬儀を元明天皇自ら行ったことが十分に示唆されている。そして、そうすることで、比売朝臣額田も「七世先霊」も大嶋も、自分の治世を助けてくれることを祈ったように思われる。

「比賈朝臣額田」は他の文献に無い名称だから額田姫王だと特定できない、また額田姫王は朝臣でなかったから比売朝臣額田を額田姫王とすることはできない、というのが史学会の慎重な意見のようである。しかし、それらは比売朝臣額田を存命中の尊称と付会した解釈だろう。

しかし、比売朝臣額田の比売も朝臣は死後の贈位とみなされるので、額田が諱或いは字（あざな）に基づくとみられる。従って、比売朝臣額田は姫君額田、姫王額田と見ることができる。戒名（宗派によって呼び名は異なる）に実名の一部を入れるのは現代も続けられていることである。

この点からも、比売朝臣額田に比定し得る人物は額田姫王以外にいない。

そして、銘文が示唆するのは、額田姫王の死去が和銅八年であり四月以前とみなせるから、その時期は７１５年一月～三月の間だったと推定されることになる。

額田王の享年について、伏鉢に残された和銅八年を額田王（額田姫王）の没年とみなして、民俗学者・歌人だった折口信夫氏は七十九歳以上とみて（折口信夫全集　第九巻（国文学篇３収　録『額田女王』）、梅原猛氏は八十三歳説を打ち出した（『塔』（下）「額田王の生涯」）。

また伊藤博氏は額田王を「一八、九歳の大化四（六八四）年」（「遊宴の花―額田王論―」）として

いるので生年を６３０～６３１年とみていたことが窺える。従って、没年が７１５年であれば八十五、六での享年になる。

偉大な先学の方々との数年の誤差にこだわるつもりは無いが、本論においては額田姫王の生年を既に６３３年頃と推定したので、梅原猛氏と同じ結論になる。

額田姫王の長寿が推定される背景として、元明期頃に長生する者が増えていた状況が窺える。「元明紀」に百歳以上の者に二斛（二石。二十斗）を与えたり、三つ子を生んだ民も散見される。戦乱が収まって戸籍が強化されて米の税収が増えて、それを時には民への褒賞に与えられて、三つ子の出産に耐えた女性もいたということである。

飛鳥・奈良時代の平均寿命が二十八～三十歳ともされる（『寿命図鑑』）こともあり、額田姫王以前の姫王と関係人物に対しては八十歳以上の享年を疑問視してきたが、百歳を全うしたとされる神功皇后は別にして、実在した女帝の享年と比較すると、推古天皇七十五歳が最長で、斉明天皇五十六歳（本論推定）、持統天皇五十九歳に対して元明天皇六十一歳、山背姫王と推定した山形女王七十三歳、元正天皇六十九歳であり、額田姫王が舒明期から元明期まで生き抜いてきたことを否定することはできないだろう。

粟原寺の造営過程の考察を付け加えておくと、伏鉢では（元明天皇が）和銅八年四月に三重の宝塔と七科の宝と路盤を進上して、寺の造営が終わったことを示している。

三重塔の塔身上部に路盤を据え付け、そこに墓を意味する銘文を彫った伏鉢（覆鉢）をかぶせて、その穴に九輪・水煙・宝珠も備えていたであろう相輪上部をはめ込んで塔が完工する。

そして、『上宮聖徳法王帝説』の裏書によれば、山田寺の伽藍造営は「始平地」から金堂完成まで二年→僧房完成まで五年（→中断十四年）→塔の心柱を立ててから完成まで三年→丈六仏の鋳造から開眼まで七年、と進んでいる。造営中断から二十四年後、６７３年（天武五年）に塔を完成させて「浄土寺」の法号を与えたのは、額田姫王の夫であり元明天皇の義父だった天武天皇だった（「癸酉年十二月十六日建塔心柱其柱礎中作円穴刻浄土寺」）。

一方、粟原寺は額田姫王が没してからわずか数カ月で塔が完成しているから、額田姫王の死去時に塔の下部（屋根から下の塔身）は完成寸前で伏鉢を含む金属製の相輪部分もでき上っていた、とみなさなければならないだろう。そうでなければ、塔身の建造、相輪の製作と設置、塔から足場や梯子を外して寺の全域を整理して天皇列席の葬儀に間に合うことはできなかったと考えられる。

しかし、額田姫王が死の寸前まで寺の造営に立ち会えたとも思えないので、金堂への仏像の安置はその遺言に従って行われた可能性は考えられる。

しかしそれと共に、火葬が行われたかどうか不明だが、額田姫王が没してすぐに元明天皇が葬儀と埋骨を終える前に諡号を与えたとは考えにくく、その一方で、元明天皇がたびたび建造中の粟原寺を訪れたとも思えない地理的状況がある。

粟原寺は標高およそ２７０メートルの高台にあるから近づくにつれて急な上り坂になるがそれは

省いて、徒歩の距離では藤原宮から１０キロメートル弱、つまり女帝が輿に揺られておよそ二時間で行けるが、平城京からはその三倍くらいあるから歩き続けて六時間を要したはずである。従って、葬儀に向かう天皇の旅に平城京からの日帰りは考えられない。

『続日本紀』によれば四月二十五日に叙位が行われている。元明天皇はその後、四月末日までの間に氷高皇女の他に重臣たち、そして次期天皇に忠誠を誓わせるためにもそれらの臣も伴って粟原寺に赴いたと思われるので、一行は粟原寺ではなく旧都で一泊して、粟原寺で塔を見上げて落成法要を行ない、祈りを捧げたものと考えられる。

（４ａ）伏鉢に刻める銘文の文字数は制限されるのに、その百七十二文字の内に「敬」と「和銅八年」が前段と後段に一回ずつ使われている。どちらも記す必要があって省くことができなかったのは、前段と後段の意味が違うからである。

紙幅の都合でここに原文を示していないが、銘文の構成は、文頭から「日並御宇東宮敬造伽藍之尓」までは草壁皇子を敬った大嶋の粟原寺造営の「発願説明」であり、それに続く「故比売朝臣額田以甲午年始至於和銅八年」から「釈迦丈六尊像」まで伽藍の造営を続けた比売朝臣額田の「造営説明」である。これが前段である。

それに続く後段、「和銅八年四月敬以進上於三重寶塔　七科鑪盤（ろばん）矣　仰願藉此功徳」から最後までは、比売朝臣額田に対する寺の「完成報告」と草壁皇子等に対する「冥福祈願」である。

その後段には主語が記されていないが、塔を仰いで、寺の造営と完成させた人物の功徳によって皆が成仏することを願った人物は、時の天皇元明以外ではあり得ない。

なぜなら、和銅八年（７１５年）は元明天皇が天皇として最後の年で、寺が完成した五ヶ月後の九月からはその娘、元正（げんしょう）天皇（文武天皇の姉。氷高皇女）の世になって元号は霊亀に変ることが決まっていたからである。

従って、その前段から後段への流れは、「粟原寺の造営に没頭したが塔を見ることなく和銅八年に他界した比売朝臣額田に対して、それを敬った元明天皇は和銅八年四月に寺を完成させたことを報告して、寺を造ったのは額田姫王と自分であると強く訴えた」、と読むことができる。

そして、そこに示唆されるのは、元明天皇の終生の思い出になったであろう伊勢に同行した吹黄戸自を通じてだけでなく、母親世代の比売朝臣額田との間に直接に親密な関係があったことである。

その理由の一つとして推測できるのは、山田寺との関連である。

山田寺は元明天皇と持統天皇の祖父だった、蘇我倉山田が整地から造営を始めて金堂まで完成したが、塔は上げられずに寺は未完成で終った。

しかも、石川麻呂は甥の讒言によって謀反の罪を着せられて金堂で自殺、自殺後に斬首されて死体を太刀で刺し貫かれるという屈辱を与えられた。その時に石川麻呂の裳に服していた額田部湯坐連など十四人が「戮（りく）」で処刑されて九人が絞首された。殺戮などで用いられる戮は死ぬまで殺してはずかしめるという意味で、そこでの被害者に額田姫王の縁者や知人が含まれていた可能性は十分

に考えられる。

しかも、その陰謀の主役で石川麻呂に兵を差し向けたのが、元明天皇の父だった中大兄皇子であり、石川麻呂がそれを察していたことは想像に難くない。

ちなみに、「史跡粟原寺址」の石碑の側に「当地には万葉の女流　額田王終焉の地だという伝承が遺されている」旨の説明版がある。

それが事実だったかどうか、額田姫王は平城京に行かなかったのか行けなかったのか、その間の事情は不明だが、元明天皇には山田寺と同じ形で塔の造営が中断した粟原寺に対する想いが強く働いて、奇妙な因縁に不安を感じたのかもしれない。そのために、急いで、天皇が代替わりする前に寺を完成させたように思われるのである。

粟原寺には謀反も罪人も関係が無いと思われるが、大嶋が草壁皇子を祀る国寺→その遺志を継いだ比売朝臣額田が草壁皇子と大嶋を祀る私寺→比売朝臣額田の想いを継いだ元明天皇が草壁皇子・大嶋と比売朝臣額田を祀る私寺に、質的に変化したともみなされるのである。

しかし、このあと起こる天武系王朝の衰退と平安京への遷都によって飛鳥京も藤原京も捨てられて、粟原寺三重塔伏鉢が談山神社（多武峰寺）に、山田寺の仏頭が興福寺に、恐らく木材と共に持ち去られて、元明天皇にまつわる両寺が消え去ったのだろう。

（5ａ）祭神に対する願文（がんもん）の最初は「皇太子の神霊、速やかに菩提の果を証せんことを」で、そのあ

とに「願わくは七世の先霊が彼岸に登らんことを、願わくは大嶋太夫が必ず仏果を得んことを」と続く（訓読みは談山神社の展示に拠る）。

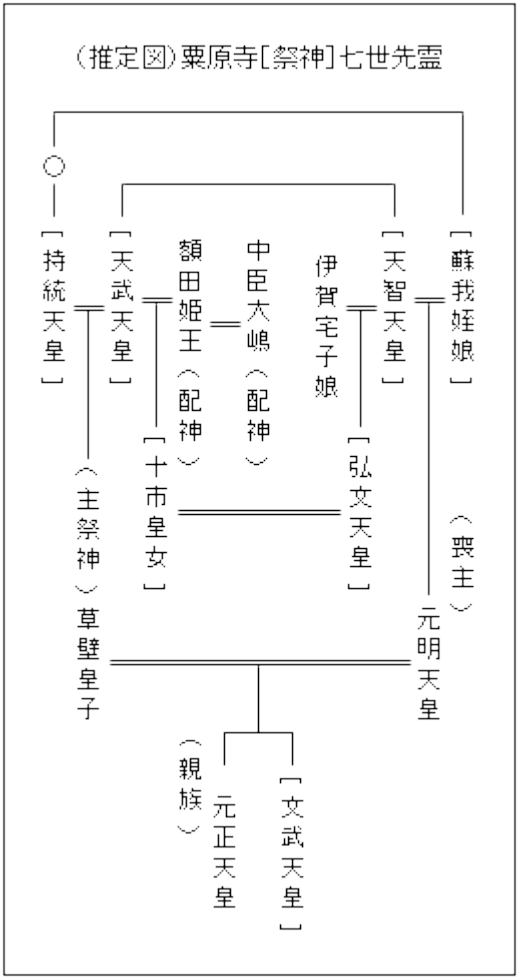
その「七世先霊」を元明天皇に先立った七代の天皇の御霊として、孝徳天皇・斉明天皇・天智天皇・大友皇子（『懐風藻』天皇になったと記される）・天武天皇・持統天皇・文武天皇と解することができるかもしれない。しかし、孝徳天皇の崩御は６５４年、斉明天皇の崩御は６６１年で同年に元明天皇が生まれている。従って、元明天皇は孝徳天皇と斉明天皇とは面識が無い。

そして、七世先霊は主祭神皇太子の後で臣下大嶋の上にあるから、それは夫より先に死去した元明天皇と親しかった皇族を示していたとみるのが妥当だと思われる。

また、寺に霊を祀ることに疑問を持つ人がいるかもしれないが、仏教各派の現代の解釈は別にして、聖徳太子が開いた寺や四国八十八カ所の寺を霊場と称し、祖霊を迎える儀式だったお盆（盂蘭盆会）等は違和感なく引き継がれており、古代においては寺・仏と霊は敵対するものではなく、人は死後に霊となって、それから菩提（悟り）を得て仏になるという思想があった。

日本最古の仏教説話集と総括されるのが『日本霊異記』（日本国現報善悪霊異記）であり、また、以下は孫引きで恐縮だが、仏教学者村上保壽（むらかみやすとし）氏の論文「空海の十住心思想と六道輪廻」の文頭に、同氏著の『密教の霊と救済』（高野山出版所）を参照して「空海の『性霊集』の中に、亡き人のために追善供養する忌日の願文がある。その内容は死者の霊の救済を祈願するものである」との記載がある。

粟原寺は歴代天皇の菩提寺ではなく、元明天皇が祀るべき霊を祀る寺になり、功績を称えられて神の諡号を贈られた額田姫王の霊は既に祀られたとみなせば、その七世先霊は元明天皇の父・母・兄・子、夫の父・母・娘の視点――、天智天皇・姪娘（桜井娘）・大友皇子（弘文天皇）・文武天皇、天武天皇・持統天皇・十市皇女で捉えることも可能であり、七世先霊から実母を外すことには抵抗を感じる。



また、斉明天皇には川原寺が創られており、祖父の石川麻呂が造営を図ったが未完で終った山田

寺は天武天皇によって完成されて浄土寺の法号を授かったので、石川麻呂の菩提はそこで弔われるとみることができる。従って、元明天皇は粟原寺がそのような二大寺と比べられることを避けて、祖父を祭神に入れなかったように思われるのである。

⑥ 額田部王と額田部姫王・額田王

『続紀』和銅五年（元明天皇の７１２年）正月十九日条に、三名が無位から従四位下に、別の三名が無位から従五位下に叙されている。新しく貴族に列せられた者たちである。

無位（无位）とは宮で仕事はあるが位階を有しない者で、無位から従四位下になれるのは親王の子、従五位下になれるのは諸王の子という制限があり、従五位下を授けられた人物に額田部王・壱志王・田中王が挙げられている。そして、名を列挙されての叙位は、死去に伴う追位や追諡でなく、存命中の人物に対する処遇だったことを示している。

壱志王は壱志姫王（「第一章」（1））を養育した壱志君の子孫の男王とみなされ、田中王は蘇我一族の田中朝臣（男王）で「壬申の乱」大海人皇子に従った田中足麻呂の血筋かと思われるが不詳であり、額田部王はまったく不詳とされている。

額田一族では同日に、正六位下から従五位下に昇進してのちに河内国河内郡擬大領（臨時の国司）に任じられた額田首人足（ぬかたのおびとひとたり）（額田八国の子）が記されている。

古来額田部氏を束ねてきたのは男性の額田部王だったと考えられ一方で、額田を冠する一族では出

雲系の額田部臣、平群の額田首等が知られているが、姓を整理し直した「八色の姓」では額田部連が第三位の額田部宿禰に挙げられただけで、臣から選別された朝臣に額田部臣は含まれていない。この点からも、額田一族は時の天皇と直接血縁関係を持たない特殊な豪族としての一定の評価と信頼を得ていたように思われる。

それまで額田部王の名で官位（官職と位階）を与えられた人物はいないので、和銅五年に突然登用されたのが額田部氏の領袖だった男王であれば、これは不詳である。

話が代るようだが、草壁皇子が二十八歳、文武天皇が二十五歳で早世したことが影響したのか、その後発生時期は不明だが、元明期には一部の皇族の間で四十歳から十歳ごとに長寿を祝う儀礼が行われていた。四十歳が初老の入り口と考えられていたことが窺える。

ウィキペディア「賀の祝い」の項に、「賀の祝いの初期の例として、『懐風藻』には「長屋王の四十賀（715年）を祝したと思しき詩賦が残っている」とある。この詩（「左大臣正二位長屋王三首 五言 元日宴 應詔」の一首）の転記は省くが、７１５年を四十歳と見ているのは、同書に記される「年五十四歳」から生年を６５９年と解しているからで、それは本論（「第一章（６）山背姫王③）で６５９年説に立つことを述べたことに合致する。

また、『源氏物語』第三十四帖「若菜上」において、十月に光源氏の四十賀が盛大に行われた話が取り込まれている。

そして、本論で６３３年生まれと推定した額田姫王は、７１２年に八〇歳だったことになる。

従って、その年正月の額田部王に対する叙位は、元明天皇による古来稀な傘寿になった無位の額田姫王に対する祝賀と捉えることができる。

「天武紀」において額田姫王は妃・皇子・皇女の後に記されており、死亡時まで位階を記されていない。しかし、額田姫王は無位から従五位下を授けられる条件の「諸王の子」を満たしていた。舒明天皇の義理の孫娘という身分だけでなく、宣化天皇四世鏡王の女の五世女王だったからである。

その叙位はまた、従七位下で四年前に死去した自分の息子の妻（徳足姫）より額田姫王の方が上位であることを皆に認めさせる儀式になったと思われる。また、死後に比売朝臣額田の諡号を贈ることによって、従五位下より四階級上になる朝臣相応の従三位の薨去として扱い、元明天皇が参列する葬儀と埋葬の理由付けにもなったと思われる。

しかし、男性の功臣に対して死後の追位が行われても一ないし二階級上が通例だったから、伊福部徳足比売臣も比売朝臣額田も極めて異例の扱いを受けている。それが伊福部徳足比売臣に久勢皇女（久勢女王）を想定せざるを得ない理由であり、直接血縁関係が無かったが天武天皇家・額田姫王家との家族ぐるみの密接な交流である。

そして、本論におけるこれらの新しい考察は、晩年が不明の額田姫王が７１２年までは存命だったことを示す新しい論拠になり、推定没年７１５年の傍証になり得るものと考えている。

更に、和銅五年の「額田部王」が『薬師寺縁起』の「額田部姫王」、また『万葉集』「額田王」の出

所ではないかと考えていることを付け加えておきたい。

本論の最後に、既に気が付かれたと思うが、個々の姫王と関係する人物に対する考察から、姫王の身分・系譜について共通する要素が抽出されている。それは姫王自身か夫の祖父、或いは父か母かの父が天皇であり、姫王が天皇三世になることである。

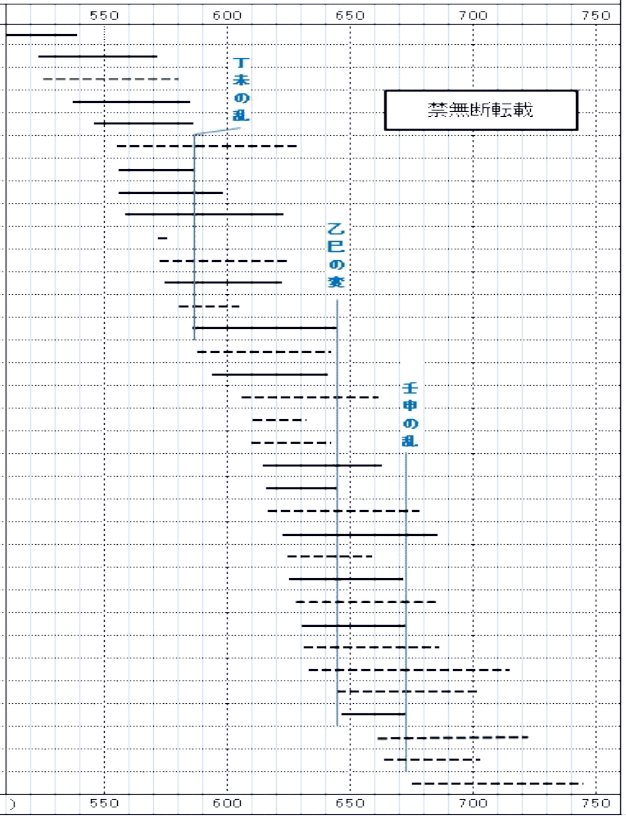
しかし、鏡王女だった額田姫王だけは義理の関係から舒明天皇三世になる。これが額田姫王と二人の姫王の父になった鏡王の特殊性であると指摘しておきたい。

そして、姫王の分析から推定された身分や資格を付け加えると、

> 姫王は祖父天皇から父また母を経由して受け継いだ、
> 私有する土地・住民・財産を管理して取り仕切る刀自の立場と権限を認められた、
> 天皇三世の女王だった。

と、本書においてはまとめておきたい。

２０２２（令和４）．１２．２１改訂版

「姫王」関係人物推定年齢表

姫王		*印は本論推定	享年
	宣化天皇	*481～ 539	59
	欽明天皇	*523～ 571	49
	堅塩媛	*525～ 580	56
	敏達天皇	538～ 585	48
	用明天皇(大兄皇子)	*547～ 587	41
本稿考証順↓	推古天皇(額田部皇女)	554～ 628	75
	桜井皇子	*555～*587	33
	押坂彦人大兄皇子	*557～ 599	43
	穴穂部間人皇女	*559～ 622	64
	舎人皇女	*571～*575	5
	糠手姫皇女	*572～*624	53
	厩戸皇子(聖徳太子)	574～ 622	49
2	**舎人姫王**	*580～ 603	24
	蘇我蝦夷	*586～ 645	66
3	**吉備姫王**	*586～ 643	58
	舒明天皇(田村皇子)	593～ 641	49
	皇極・斉明天王(宝皇女)	*606～ 661	56
	押坂錦間皇女	*610～	
4	**上宮大娘姫王**(春米女王)	*610～ 643	34
	(額田)鏡王	*614～*662	49
	古人大兄皇子	*614～ 645	32
	吹黄刀自(吹芡刀自)	*616～*678	63
	天武天皇(大海人皇子)	*622～ 686	65
	車持与志古娘	*624～*659	36
	天智天皇(葛城皇子・中大兄皇子)	626～ 672	47
7	**鏡姫王**(鏡王女)	*628～ 683	56
	産那公高見	*630～*672	43
5	**倭姫王**	*631～*687	57
8	**額田姫王**(額田王)	*633～*715	83
	持統天皇(鸕野讃良皇女)	645～ 703	59
	大友皇子(弘文天皇)	648～ 672	25
	元明天皇(安陪皇女)	661～ 721	61
1	**壱志姫王**	*663～*702	40
6	**山背姫王**(山形女王？)	*674～*745	72
	20221221 rev.by N.Igarashi	(Ave. 50.0)